

豊前方言アクセント : 二拍2類名詞

木部, 暢子
純真女子短期大学講師

<https://doi.org/10.15017/10515>

出版情報 : 文献探究. 9, pp.33-45, 1981-12-15. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

豊前方言アクセント

——二拍2類名詞——

木部 幌子

一

日本語の二拍名詞は、アクセント上、1類から5類までに分類されるが、現代諸方言でこの5つの類を全て異なるアクセントの型で区別するような方言はごくわずかで、多くは型の数を2つ以下としている。この際に類の統合という現象が起きるわけだが、どの類とどの類が統合して同一の型になるかは、方言によってまた異なってくる。例えば現代東京方言では、1類(○●▽)・・・2、3類(○●▽)・・・私の北九州市方言では、1、2類(○●▽)・・・3類(○●▽)・・・4、5類(○●▽)という具合に、型の種類と数は東京方言と同じであるが、2類の位置が異なってくる。(●は高音拍を、○は低音拍を、▽は助詞を表わす。カタカナ書きの右側に傍線を引いて、高音拍を表わすこともある。)

ところが、北九州市方言におけるこの第2類の位置は、最近とみにあやしくなっており、東京方言と同じ、1類・・・2、3類・・・4、5類という状態に変化しつつある。つまり2類語において○●▽↓↓○●▽の變化が起りつつある。これは北九州市に限ったことでは

なく、大分県をも含めた豊前式アクセントの地域全般に亘って、多少かれ少なかれ起きている変化である。この豊前方言と似たような状態にあるのが三河、遠州方言のアクセントで、やはり1、2類(○●▽)・・・3類(○●▽)・・・4、5類(○●▽)という体系から、1類(○●▽)・・・2、3類(○●▽)・・・4、5類(○●▽)という体系へ変化しつつあるという(寺田泰政氏『遠州方言のアクセント』昭和5年、美哉堂、山口幸洋氏『アクセントにおける移行性分布について』第3回国語学会秋期大会発表、昭和5年)。

豊前方言アクセントも三河、遠州方言アクセントも、以下は東京方言アクセントと同じ体系にならざるを得ないと思われるが、寺田泰政氏や山口幸洋氏指摘されるように、やがて変化する早い地域と遅い地域とがあり、同じ2類所属語中にも、○●マ型化の早い語と遅い語とが見られる。地理的に隔った二地域で同様の変化が起ることはある時、その変化の傾向、特色を比較してみることは、意義深いことがある。

ただし、豊前方言十三型、遠州方言十三型に、類別展語が○●▽↓↓○●▽の型の変化を起している途中の段階では、相当な小規模の現象もあるものと予測され、そのうち型と決定することになり困難な場合もあるだろう。この点で寺田氏や山口氏に素朴な疑問を抱いて

ざるをえない。すなわちゆれのある場合にはどのようなようにして型を決定したのか、である。さらに、ゆれと言っても

(1) 同一文脈でのゆれ(「石が」を何度か発話した際のゆれ)

(2) 異なる文脈でのゆれ(「石が」「石を」「石に」……等によるゆれ)

の二種類が考えられよう。私自身も「石が」のアクセントはどうかと問われると、「イシガ」とも「イシガ」ともどちらとも言いかねる。ところが、これが「石投げる」のアクセントはどうかと問われれば、さほど迷うことなく「イシナゲル」であって「イシナゲル」ではないと答えるだろう。つまり調査表の作り方によつては、豊前方言のように変化の途中段階にある方言でも、どちらの型がより優勢であるかを決定することが可能なのである。

このように立場から、豊前方言アクセントの二相第2類名詞の現状を報告し、それを三河、遠州方言のアクセントと比較してみようとするのが小稿の目的である。

二

この調査は、私の勤務している福岡市の純真女子短期大学二年次生(学生を対象として行なった。従つて年齢は全て19~20歳である。福岡県の北東部、及び大分県出身者に臨みして行なった。被調査者は以下とおりである。

- A 福岡県北九州市小倉南区
- B 同 同 戸畑区

C 福岡県北九州市八幡西区

D 同 同

E 同 同

F 同 田川郡大任

G 同 同 川崎

H 同 同 糸田

I 同 同 行橋市楠童

J 同 同 豊前市千束

K 同 同 大分県東国東郡

L 同 同 国見

M 同 同 西国東郡真玉

N 同 同 別府市馬場

O 同 同 大分市港尾

P 同 同 北海郡那佐買関

Q 同 同 津久見市西浦

R 同 同 佐伯市青山 (地図参照された)

調査語彙は、平山輝男氏『九州方言音調の研究』、金田一春彦氏『国語アクセントの史的研究所』等を参考とし、使用頻度の低く、非日常的な語を除いて、次の19語とした。

石、歌、音、川、紙、北、梨、橋、町、登、冬、夏、雪、燕、殻、胸、町

その他必要に応じて、1類語、3類語なども併せて調査した。次に調査方法であるが、これらの語は事前に述べたように、アク

セントのやれ、文脈によるやれが予測されるので、次の四つの場合のアクセントを調査することとした。

a □□ガ

ム □□ヲ

c □□〜(ヘヲを省略したもの)

d □□ニ(デ)

cを調査項目に加えたのは、日常会話では「ヲ」を使用しないことの方が多く(本を取って↓本取って、川を渡る↓川渡る)、主に助詞を介さないこのような単語連続において、尾高型と平板型との差が出るからである。

調査は二回行ない、一回めは3類名詞のみをa)〜d)の文で示し、二回めは3類名詞と並べて、ム、c)の文で示した。一回めの調査結果をへ表し、二回めの調査結果の一部をへ表すに示す。一回めと二回めの特色、及び差は次のとおりである。

⑦ 北九州市のA)〜D)では、ム)の文において、一回めの調査より

も、3類語と並べて出した二回めで尾高型が増える。一回め二回めともに平板型に言ったのは、A)の「北」くらいのもので、他は二回めでほとんど尾高型となつてしまふ。

⑧ 福岡県南部のF)〜J)では、ム)の文において、やはり二回めは尾高型が増えるが、北九州地区ほどではない。一回め二回めともに平板型だったのは、F)石、歌、音、紙、北、梨、肘、昼、冬、夏、町、G)紙、北、昼、H)紙、北、I)紙、北、肘、J)歌、川、紙、北、梨、橋、昼、冬、夏、雪、殻、である。

⑨ 大分県のK)〜R)では、ム)の文において、3類語と並べて出した二回めには、むしろ平板型が増えている。例えば、L)石、K)音、M)音、肘、燕、P)の川は、二回めでは平板型となった。北九州市のように二回めで尾高型となったのは、K)石、P)・N)の肘である。

⑩ E)は3類ばかりでなく3類も平板型に言う傾向がある。3類語を平板型に言うのは、北九州市若松区や八幡西区など、筑前式アクセントに近い地域の若年層に著しい。

⑪ c)の助詞を介さない文では、全般的に平板型が多くなるが、これは特にF)〜R)の二回めの調査において著しい。すなわち、3類語と並べて出した二回めでは、F)〜R)においては

オトダス(音出す) イシオク(石置く)

エビダス(指出す) カギオク(鍵置く)

ナシムク(梨むく) オトタテル(音たてる)

カワムク(皮むく) イエタテル(家たてる)

ヒジマデル(肘曲げる)

アシマデル(足曲げる)

の両者は明確に区別される。A)〜D)においては、両者を区別する意識はそれほどないようである。A)〜D)では逆に3類語に

ユビダス(指出す) カギオク(鍵置く)

カワムク(皮むく) イエタテル(家たてる)

アシマデル(足曲げる)

のようなアクセントが聞かれるが、これは言うまでもなく「俗」

を持つ型である。AとDの2類語

オトノス(音出す) イシオク(石置く)

ナシムク(梨むく) オトタテル(音たてる)

ヒジマゲル(肘曲げる)

は、「谷」を持つ型を持たない型か、判別が難しいところである。

⑦ 一方、豊前方言アクセントにおいては、1類語(平板型)がカセヒツ(風邪ひく)、カキムク(柿むく)、のように、動詞を低接させることは絶対がない。従って2類語の場合も、動詞を低接させていけば「アザツクル、ヒジマゲル」、その語は無条件に尾高型であると言いうことが出来る。

三

へ表1へ表2と⑦より⑥から、豊前方言の二拍2類名詞がアセントに属してどのようなことが言えるだろうか。

さう前に、最初に提起したゆれの問題を考えなければならぬ。へ表1へ表2の明らかなように、後接助詞や後接動詞の種類によつて、どうアクセントにはかびり違がある。ゆれはゆれとして、どうもま報告するより他はないだろうが、そのうちでも何か基準にしたりする場合はないだろうか。

「ここが前述のゆれを思いあわせると、助詞を介さないで直接動詞と語をつく場合が基準となるのではないかと考えられる。助詞を介するみの文では、一回めと二回めとで非常にゆれが見られる

に灯して、この文ではほとんどゆれが見られない。その上、この文では2類語と3類語との区別意識がそれほど確かではなく、むしろ2類語に引きずられる形で2類語と尾高型とが混ざり合っている。これは、助詞の後接した文節の形では潜在化している2類と3類の区別意識が、この文においては顕在化してゐるからではないだろうか。

少くとも豊前方言においては、格助詞「が」や「ヲ」等の後接する文節よりも「裸の文節」(八川上泰氏、注1)論文による)の方が、より正確に方言話者の意識を反映していると言えらる。このようにことは、三河、遠州方言においても当てはまるのではないだろうか。

ただし、北九州市のAとEでは、「裸の文節」のあとに動詞が高く付くからと言って、このような語をすべて平板型とすることは出来ない。3類語の「裸の文節」にも動詞が高く付くことがあるのである。3類語の場合には「谷」を持つ型であるが、2類語の場合には実際の発話では「谷」を持つ型と「谷」を持たない型と両方が聞かれるが、発話者の意識としては、2類語と3類語との区別意識はないようである。その結果、二回めの調査で2類語、3類語ともに同じような準アクセントを作ることにたつてしまつたのだと考える。ゆれのある場合は、以上のように「裸の文節」に対する動詞の付き方を見ることで、その語が尾高型か平板型かを決定することとする。

次に、豊前方言の二拍2類名詞のアクセントの尾高型化について

考えてみよう。おおよそ次のようなことが言えるのではないか。

(一) 地域による差 北九州市地区、福岡県南部地区、大分県地区の順で、2類語の尾高型化が進んで^(注3)いる。北九州市地区では、(表)↓からわかるとおり、2類語のゆれが激しい。しかしさきに述べた如く、3類語との区別意識はほとんどなく、尾高型化がかなり進んでいると言つてよいだろう。福岡県南部地区では、「裸の文節」において平仮型が増えることからわかるように、潜在的平仮型が多い。その中でも完全に尾高型化しているのは、Hの「歌、川、燕」、Iの「燕」くらいだろう。地はゆれがあり、平仮型に発音される時と尾高型に発音される時とがあるが、Cのような文脈では平仮型の意識が顕在化してくる。大分県地区では、2類語と3類語は区別されている。その中でも尾高化しているのは、Kの「歌、音」、Vの「川、雪」、Oの「歌」、Pの「歌、燕」、Q・Rの「町」である。

(二) 語による差 地域による差と同時に、同じ2類所屬語でも尾高型化しやすい語とにくい語とがある。しやすい語は、「歌、燕、胸、町」、北九州市や福岡県南部地区では、この他に「音、川、橋、雪、夏、冬」。尾高型化しにくい語は、「北、梨、肘」、大分県地区ではこの他に「紙、石、音」などがある。

この尾高型化の傾向を三河、遠州方言と比べるとどうだろうか。
手田泰政氏によると、遠州方言で尾高型しやすい語は「町、村、夏、冬、昼、歌」などで、逆に尾高型化しにくい語は「梨、紙、石、音」などとなっている。また山口幸洋氏によると、尾高型化しやすい語は「上、下、歌、夏、冬」などで、尾高型化しにくい語は「型、紙、

弦、梨、音」などだという。

興味深いのは、豊前方言と三河、遠州方言とで同じ語が上げられていることである。「歌、町、夏、冬」は両地方ともに尾高型になりやすい語であり、また「梨、紙、石、音」は両地方ともに尾高型になりにくい語となっている。地理的に隔たつた両地方での言語変化に同一の傾向が見られるとすれば、両地方の変化には同じ要因が働いているのではないかと考えられる。

そこで思い当たるのが、共通語化の問題である。豊前方言や三河、遠州方言は、2類を除く他の四つの類は共通語アクセントと同じ型と同じ体系であるのに、2類だけが共通語とは異なる型、異なる体系を作つていた。このような2類語は、共通語アクセントの影響を受けて、共通語と同じ体系に変化しやすいだろうと考えられる。そして豊前、三河、遠州の両地域で尾高型化しやすい(言い替えれば共通語アクセント化しやすい)「歌、町、夏、冬」は、他の語に比べてテレビやラジオで聴くことが多いことばなのである。

他の類の調査において共通語アクセントへの傾向が見られる。例えば3類所屬語で頭高型となる「熊、貝、葱、桑、雲、鯛」、2類所屬語で頭高型となる「鯨、枕、妻、姐」、2類所屬語で平仮型となる「他」などは、共通語アクセントの影響に思われる。

一方、「梨、紙、石、音」が尾高型化しにくい理由にも、それなり理由があるものと思われる。「梨」は同じ菓物の「柿、桃、りんご」(ともに平仮型)等との関係で平仮型を保つたことばと考えられるし、「紙」は同音語「曼」との関係から尾高型が避けられ

なども考えられるだろう。

又類語の尾高型には、第二拍めの母音の広狭が関係しているのではないかと考えられなくもない。広い母音を持つ「歌、癒、川」は尾高型にしやすい、狭い母音を持つ「梨、時、紙、石」は尾高型化しにくいようである。しかし、豊前方言においては、母音の広狭の差はそれほど重要な要因ではない。なぜなら、第二拍めに広い母音を持つ「類語(平板型)」に尾高型化が全く見られないからである。

例えば「類語」の「鳥賊、蓋、札、床、柵、鼻、枝、丘、胡麻、虎」などは、第二拍めに広い母音を持つが、平板型→尾高型の傾向は全く見られない。反対に、第二拍めに狭い母音を持つ「反汗、蟻」などは頭高型に発音する人が、福岡県南部、大分県に多い。福岡県田川郡では、これらの語を尾高型に発音する人もいることから、この地域では「反汗、蟻、杉」が何らかの理由で○●▼→○●▼の变化を起し、更に第二拍めに狭い母音を持つために○●▼→○●▼の变化を起し、更に第二拍めに狭い母音を持つために○●▼→○●▼の变化を起したのだと思われる。1類語のこのような傾向を見ると、2類語の尾高型化に母音の広狭が直接原因していたとは考えられない。

四

最後に、二拍2類名詞の尾高型化に関連して、他の三拍○●●型語にも○●○型化が見られることについて触れておきたい。

三拍名詞で中高型化しやすいのは、「着物(形類)」、思い、伺い、願い、白髪、刀(頭類)、大八、背巾(兜類)であり、三拍動詞

で中高型化しやすいのは、「尽きる、尽く、失せる、至る、及ぶ、奢る、采寸、悟る、印寸、積める、誇る、啞ぶ、犯す、名乗る」、三拍形容詞で中高型化するのは、「赤い、浅い、厚い、甘い、……」などの1類形容詞全てである。動詞には共通語アクセントでも中高型のものが多いので、豊前方言と言ふよりは共通語アクセントより影響がもしれない。三拍名詞の中高型は、「平山輝男氏九州方言音調の研究」(学界出版社、昭和25年)にも指摘されているが、1類形容詞の中高型化は、最近の変化であるらしく、九州方言音調の研究には、東京語に同じとされている。

その他、助動詞や助詞の付く文節にも、東京方言の平板型に対して豊前方言では中高型にあらわれることがある。

東京 豊前
カゼダ(感ぜ) カゼヤ カゼヨ(感ま) カゼヨ

さらに、2類名詞の尾高型を共通語化としてとらえたが、豊前方言自体に平板型を尾高型に変える動きがあるのかもしれない。おととしの両者が関係しあうと、2類名詞の尾高型化は、最近は著しいだろうと思われる。

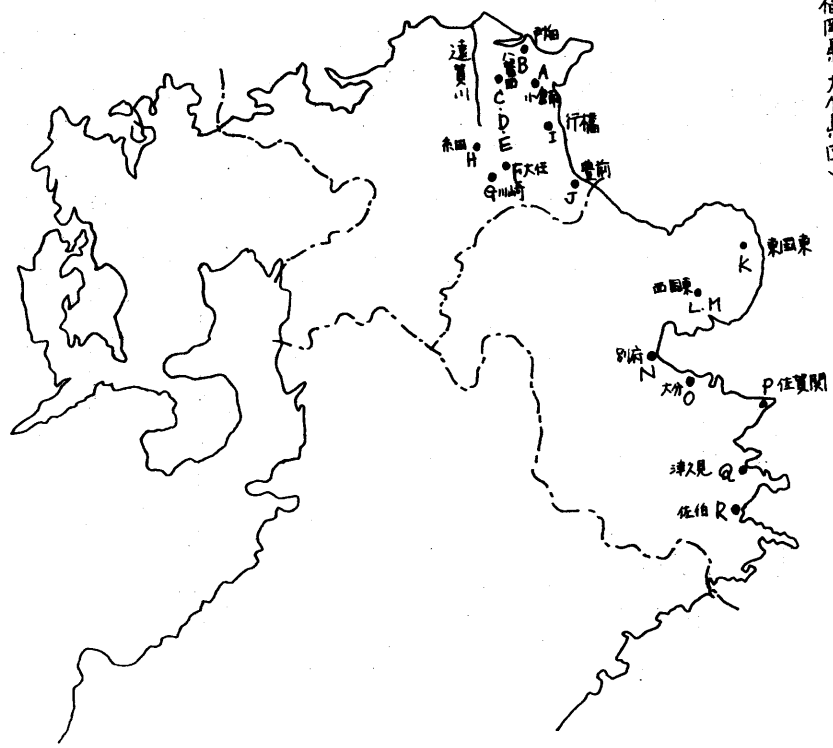
注

(1) 川上素氏「花高し」と「鼻高し」—東京アクセント段階観の限界—」(『音声学協会報』82、昭和26年)による。

(2) 奥村三雄氏は「国語アクセント史の一問題—出雲方言のアクセントを中心に—」(『藤原宇一先生古稀記念論集 方言学論叢』II、昭和26年)において、助詞カラの付いた形を判別用いる方法を提唱された。豊前方言アクセントでは、これより二、三拍の助詞が従属式、あるいは低接式であるために、出雲方言の場合のように弁別力を持っていない。しかし、助詞が助詞を介さずに接する場合には、高く付く、低く付くかで平板型か反高型かを判別することができる。出雲方言の「カラ」に当たるものが、豊前方言の、名詞に直接続く助詞であると思う。

(3) 平山輝男氏「九州方言音調の研究」(学界之指針社、昭和26年)に「但し、最近特に福岡県の諸都市の発達に於いて、他方との移住も多く、又、他の地方との交渉が盛んに行われる所においては幾分の動搖も認められ、又、市街地と山間地方とでも、多少の差異がある。」とある。

福岡県大分県四



< 表 2 ② >

R	Q	P	O	N
オトヲダス・オトヲダス ユビヲダス・ユビヲダス	オトヲダス・オトヲダス ユビヲダス・ユビヲダス	オトヲダス・オトヲダス ユビヲダス・ユビヲダス	オトヲダス・オトヲダス ユビヲダス・ユビヲダス	オトヲダス・オトヲダス ユビヲダス・ユビヲダス
カギヲオク・カギヲオク	イシヲオク・イシヲオク カギヲオク・カギヲオク	イシヲオク・イシヲオク カギヲオク・カギヲオク	イシヲオク・イシヲオク カギヲオク・カギヲオク	イシヲオク・イシヲオク カギヲオク・カギヲオク
カワヲムク・カワヲムク	ナシヲムク・ナシヲムク カワヲムク・カワヲムク	ナシヲムク・ナシヲムク カワヲムク・カワヲムク	ナシヲムク・ナシヲムク カワヲムク・カワヲムク	ナシヲムク・ナシヲムク カワヲムク・カワヲムク
ハナヲツクル・ハナヲツクル	アザヲツクル・アザヲツクル ハナヲツクル・ハナヲツクル	アザヲツクル・アザヲツクル ハナヲツクル・ハナヲツクル	アザヲツクル・アザヲツクル ハナヲツクル・ハナヲツクル	アザヲツクル・アザヲツクル ハナヲツクル・ハナヲツクル
アシヲマゲル・アシヲマゲル	ヒジヲマゲル・ヒジヲマゲル アシヲマゲル・アシヲマゲル	ヒジヲマゲル・ヒジヲマゲル アシヲマゲル・アシヲマゲル	ヒジヲマゲル・ヒジヲマゲル アシヲマゲル・アシヲマゲル	ヒジヲマゲル・ヒジヲマゲル アシヲマゲル・アシヲマゲル

▲……一回めの尾高型で二回めの平板型となったもの

×……一回めの平板型で二回めの尾高型となったもの

—— 純真女子短大講師 ——